

上海図書館

中国語学科 竹内 誠



上海といえば、多くのひとは、高層ビルが林立し、ひとや車が盛んに往来する、活気にあふれた、モダンな都会といった印象を持つに違いない。そのなかにあって、淮海中路というストリートは、閑静な住宅が多く、また、あちらこちらに、かつてのフランス租界を髣髴とさせるエキゾチックな建物を目にする事ができる。上海図書館は、かつて市の中心である人民広場付近にあったが、現在、淮海中路の比較的西よりに移築されている。その垢抜けた白亜の姿は、境界ではひときわ目立つ存在だ。階段を上がり、館内に入って、まず気づくのは採光に工夫を凝らし、なかが非常に明るいことである。また洒落たカフェテラスが設えてあり、ほかの図書館とは、違った雰囲気を出している。

朝8時から開館し、セクションによっては、午前11時から午後1時まで休憩し、手続きができない場合もある。入館の手続きは、いたって簡単。所定の書類に必要事項を記入し、身分証明書を提示し、10元（150円程度）を支払えば、読者証なるプラスチックのカードがもらえる。ただし、閲覧のみで、貴重書閲覧や館外貸し出しの条件が加わることによって、料金が変わる。場合によっては1000元（15000円程度）といった高額の押金（保証金のようなもので、事後、返金される）を支払わなければならない。日本と違って中国には押金制度というものが存在する。これは別に、図書館だけにかぎらず、ホテル、レンタルといった方面では当たり前である。次にすることは、手荷物をコインロッカーに預けること。コインロッカーから出てくる暗証番号が印字されたレシートのような紙切れを受け取る。開けるとき必要となるので、失わないように注意が必要。

コンピュータ端末から閲覧したい書籍を請求するのは、国家図書館と同じである。カウンターのところには大きな電光掲示板があり、書籍が受け取ることのできる利用者の名前が順次示され、病院の待合室さながらである。見ていると、日本人とおぼしき名前をときたま見受ける。

本図書館は四階からなり、国家図書館と比べると、あまり広いという感じはしない。筆者がもっぱら利用するのは、一階奥にある近代文献室。つまり近代報紙と古籍（20世紀前後に発刊された新聞と古典籍）が閲覧できる部屋のことである。マイクロフィルムの所蔵量で、国家図書館に一籌を輸するも、設備、サービスの点では、上海図書館に軍配が挙がる。ハードコピーをとる際、国家図書館では、いちいちコピーする箇所を書いて、申し込むという手間があり、おまけに受け取りに少々時間がかかる（込みようによっては3、4日かかる）。そこへ行くと、上海図書館は、現物を見ながら必要箇所を示して、その場でコピーしてくれるので、遺漏や間違いがなく、時間的に無駄がない。使い勝手のよい、お手本のような図書館である。日本人の同業者のなかでも人気があるのも故あることと納得がいく。

蛇足ではあるが、すぐそばに、行列のできるイスラム風の包子店（肉饅屋）がある。一口食べてみれば、筆者が、件の図書館にせっせと通う理由がおわかりいただけると思うのだが...

たけのうち まこと（教授・中国文学）